

## 日英語対照表現構造の原理

嶋 村 誠

### I. はじめに

日本は、まれにみる翻訳天国といわれている。なるほど、過去に出版されたものをみると、一つの英米文学作品に対して、これまでに数種類の訳書が出版されている例も少なくない。英米では、外国語で書かれた作品に対する英語の訳書は、1種類しかないことが多い。もちろん、複数の訳書が出版されていることもあるが、それは、先行の翻訳に対して異を唱えて新しい解釈を示す目的で、あるいは、かつて訳された時点から長年月を経るうちに訳文が古くなったために、改訳されるということが多いようである。こうしてみると、日本は特殊な翻訳王国なのかもしれない。

しかし、その日本における翻訳には、予想外に誤訳が多いということが表立って問題にされ始めたのは、比較的最近のことであり、結果的にみると W. A. グロータース・柴田武 (1967) がその火付け役になったと思われる。この本では外国語を日本語に翻訳する場合に、日本語を駆使する外国人の協力を求めて、上質の翻訳をすべきであるということが力説されており、この本自体が、著者グロータース氏が英語で書いたものを、柴田氏が日本語に訳し、さらにそれを日本語に堪能なグロータース氏が目を通すという、理想的な状況で翻訳されたものであった。その後、翻訳関係の雑誌<sup>1)</sup>や単行本が数多く出版されたり、翻訳者を養成する機関ができるなど、翻訳に対する関心の度合はますます高

1) 『季刊翻訳』(みゆき書房)が1973年に創刊され、数年出された後に休刊になると、その後を引き継ぐかたちで『翻訳の世界』(日本翻訳家養成センター、後にバベル・プレスと改称)が1976年に創刊され、今日に至っている。

まっているように見受けられる。翻訳関係の出版物のなかで、とりわけ誤訳指摘が注目されているようであるが、それらは主として具体的な誤訳例を取り上げてその訂正をするかたちのもが多く、具体例に即しているだけあって、個別の問題であっても説得力がある。

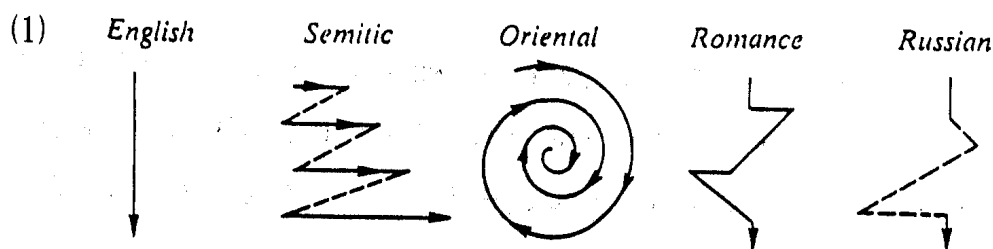
ところで、言語の比較対照分析は、本来外国語教育に貢献するために始められたものであるが、いまでは、生成文法が隆盛をきわめていることもあって、言語間にみられる普遍的な性質を探り出す手がかりとしても用いられている。しかし、いずれの場合にも、翻訳がその研究の中心に据えられることはなく、むしろ、上質の翻訳が比較対照分析の資料として用いられるという状況にとどまっている。ただし、上質の翻訳を資料にしてふたつの言語を比較対照していくうちに、言語を律しているなんらかの一般的な原理が得られるならば、外国語教育や言語研究に資するだけでなく、もしかすると翻訳作業に資することができるかもしれない。

## II. 対照レトリック

文章を書くときに、書こうとする題材の取り上げ方や、書き方が大切なことは、いうまでもない。書き手は、自分が言わんとすることを、効果的に言い表わすためにいろいろな工夫をこらすものである。米国の大学では、文学関係の学部に限らず、新生は必ず Freshman English のコースを履修し、徹底的に作文の訓練が行われている。テキストには、話の進め方、すなわちパラグラフ展開方法や、書き方の説明が与えられていて、それにもとづいて実地訓練が行われるような仕組みになっている。一方、日本の大学における全学生を対照とした国語教育、特に作文能力を高めるための体系的な教育は、残念ながらほとんど行われていないのが実情であろうが、仮に、わが国でも、米国の大学のような国語教育を始められたとしよう。そうして、日本語によって説得力のある作文を書くことのできる能力が高まったとき、それがそのまま、外国語によって説得力のある作文を書く能力の向上にもつながっているのであろうか。つまり、ある言語を用いて身につけた効果的な話の進め方が、他のすべての言語に

共通して有効であるかという点、必ずしもそうではないようである。

南カリフォルニア大学の応用言語学教授 Robert B. Kaplan は、アメリカで学んでいる外国人留学生が英語で書いた、700 例の作文を丹念に分析したところ、その英語には、各学生の母国語において効果的な話の進め方とされているもの、すなわち、その言語特有のレトリックが反映されていて、それが原因で望ましくない英文になっていることを具体例をあげながら明らかにしていった。そして、Kaplan はその観察にもとづいて、各言語における話の展開のしかたの違いを、次のような図式によって、表わそうとしている (Kaplan, 1966)。ここでいう話の展開のしかたとは、すなわち、各言語使用者の思考パターンを表わすものでもある。



上の図で、英語が直線的であるということは、英語では、そのものずばりのものの言い方が、最初の文から最後の文まで一貫してなされるということであり、主題に関連の深いものでなければ話に出さない、というパラグラフ展開方法がとられるということである。アラビア語をはじめとするセム系の言語においては、並列構造を用いながらパラグラフを展開させるという特徴がみられるということを示している。一方、東洋語の特徴は、物事の取り上げ方が、直接的でなく、間接的であるということである。話の核心に直接触れるのではなく、わずかに主題に触れながらそのまわりをぐるぐる旋回するという方法をとる。したがって、そのような書き方を英語に持ち込むと、必要以上に間接的な書き方をした悪文を生み出してしまうことになるので、われわれ日本語を母国語とする者はそうならないように留意しなければならない。なお、ここで注意を要することは、Kaplan が(1)の図式でいう東洋語とは、具体的には中国語と

朝鮮語のことであって、日本語は除外しているという点である。しかし、このように日本語を除外する分類については、Hinds (1983) の言う通り言語学的な理由がないと思われるし、また Kaplan 自身も、日本語を除外することを、理由を明らかにしないまま脚注で記しているだけであるから、再検討する必要がある。つぎに、フランス語やスペイン語などのロマンス系言語では、話を進める途中にある程度の脱線がみられ、主題を論じるうえであまり関係のないことが途中に出てくるが、最終的にはある方向に向かって論が展開するということを表わしている。最後のロシア語では、脱線のしかたがさらにはげしくて、パラグラフの中心概念とは関係のない挿入的なことがらを、大きく膨らませてしまうため、話の行方がはっきりしなくなってしまうということを、破線で示している。

Kaplan はそれぞれの言語と文化がもつ、独特なバラグラフの展開のしかたを、対照レトリック (contrastive rhetoric) と名づけ、外国語教育者は、いま対照文法を教えているのと同様にして、対照レトリックをも教えなければならぬと説いている<sup>2)</sup>。

### Ⅲ. 表現構造の違い

二つの言語から、同じ場面で使われて、しかも大体同じ機能をもつ表現を比較対照するとき、両者の統語構造の違いを差し引いても、まだ残されている違いがある場合に、それを表現構造の違いと呼ぶことにする。すでに、嶋村 (1989) で、日英語の表現構造の違いについていくつか観察したが、それぞれの違いを互いに関連づけずに捉えていた。本稿ではさらにその延長として、前稿でとりあげなかったほかの表現構造上の違いにも触れながら、それらのいくつかが統一的な原理にもとづくものであると考えられることを示してみたい。(比較対照する資料としては、主として日本語による原作とその英語訳、

2) 対照レトリックという分野は比較的最近生まれたもので、Kaplan (1966) が先駆的なものであるが、日本語と英語の対照レトリックの分野におけるこれまでの足取りを概観するには、Oi (1984) と Ricento (1987) が便利である。

および英語による原作とその日本語訳を使用する。)

### 1. 人間指向型と状況指向型

表現構造の違いの一つとして、英語では、人間や個体が表現の中心に置かれ、人間がなにかの行為者となるような言い方が好まれるのに対して、日本語では、そのような人間は表現の前面からは退いて、その場面の状況や事柄が表現の中心となるような表現方法が好まれる傾向が見られる。

- (2) a. I myself have been working for nearly ten yeas now.... Except for pressing business or an emergency, he has no wish to change his route to work, even though he ought to be thoroughly sick of it. (AG, 304)
- b. 実はこの私も今日まで十年近く、勤め人生活を営んで来ている者であるが... 家を出てから、勤め先へ達する順路にしたところが、よほどの用事か突発事故のない限り、毎日通い飽きているはずの道順を、変更する意欲は起きないものである。(永井「朝霧」、15)
- (3) a. He made a nice start.
- b. 出足は好調だった。(江川 1964 : 27)
- (4) a. I've got an important business just now.
- b. いま大事な用があるのです。(江川 1964 : 224)

例えば、(2a) では、人間である he が主語として表現の中心に据えられているが、(2b) では、人間は主語の位置から退いて、「意欲」が表現の中心を担っている。同じ趣旨のことを伝えようとする文でありながら、日英語のあいだでこのような表現構造の違いがみられる。

(2)で引用した原文のすぐ前の部分では、勤め人で律義者の X 氏というこの小説の主人公がみせる毎日の通勤時のようすについての紹介があり、(2)の部分では語り手が、自らの経験を引き合いにだしながら、自分も X 氏に共感を示しているところである。したがって、ここは、自分の場合について述べようとしているのであるから、「私」を取り上げて表現するのが、直接的なものの言い方

であろう。それに対して、「意欲」という心理状態を表わすものはその人間に付属するものであるから、これを表現の中心に据えて、主体である人間について述べるのは、間接的なものの言い方ということができよう。ところで、すでにみた Kaplan の図式は、元来、話の進め方、つまりロジックの展開のしかたについて観察されているものであるが、(2)-(4)にみられる日英語の違いをいまのように考えると、Kaplan の図式が本稿でいう表現構造の違いについてもあてはまるものであると考えることができよう。

## 2. 人間全体を表わすことばと一部を表わすことば

英語と同様に日本語においても、人間を取り上げて表現しないわけではない。しかし、つぎの(5)-(12)などにおいては、人のようすを表わす表現構造の違いがみられる。英語では、まるまる一個の人間全体を表わすことばを中心に据えて表現するのに対して、日本語では、一個の人間の一部分だけを指すような表現を用いている。それが体や体の部位のこともあれば、心理状態などのこともある。

- (5) a. Fortunately, it was a small knife, and the bone was hard, so I still have my thumb. (BT, 9)  
 b. 幸いナイフが小さいのと、親指の骨が堅かったので、今だに親指は手に付いている。(夏目『坊っちゃん』、7)
- (6) a. I was so annoyed that I flung the rook I was holding at his head. (BT, 13)  
 b. あんまり腹が立ったから、手にあった飛車を眉間に擲きつけてやった。(夏目『坊っちゃん』、9)
- (7) a. This so took me aback that I opened my mouth and let out a peal of laughter. I woke up with this, to find the maid opening the shutters. (BT, 25)  
 b. おれがあきれ返って大きな口を開いてハハハハと笑ったら眼が覚めた。(夏目『坊っちゃん』、19-20)

- (8) a. What a long hair you' ve got!  
 b. あなたの髪は長いわね。(江川 1964 : 224)
- (9) a. He was red in the face.  
 b. 顔が赤かった。(江川 1964 : 118)
- (10) a. I have a pain in the knee.  
 b. ひざが痛い。(江川 1964 : 118)
- (11) a. I was feeling weak in the legs.  
 b. 脚がまいっているような感じがした。(江川 1964 : 118)
- (12) a. He has an eye for paintings.  
 b. 彼には絵を見る目がある。(江川 1964 : 369)

その他、前項の(2)などは、この項にもあてはまる例文である。(2a)では、人間を全体的に捉えた he が用いられているのに対して、(2b)の「意欲」は、人間の一部分しか捉えることのできない、一種の心理状態を表わす語を中心に据えた形の表現と考えられよう。

これらの例文を、Kaplan の図式を比べてみると、日英語のどちらにおいても人のようすを表わすための文であって、英語の方は話題の人の全体像を直接的に表わす表現を中心に据えているが、日本語の方はその人の一部分だけを指すものを中心に据えて、人の周辺的なことを取り上げることによって、その個人について触れていることをにじみ出させるにとどめるという方法をとっている。つまり、この場合にも、日英語の表現構造の違いを Kaplan の図式と結びつけて考えることができる。

人に呼びかけるときに、日本語では職業名をはじめとして、役職名や、親族名称など、その人に付随するものを取り上げて、それを呼びかけのことばとして使うと自然な呼びかけであると感じられ、英語とちがって、もっぱらその人だけしか表わさない固有名詞という直接的な名称を用いることができる状況は限られている。特に、ファースト・ネームで呼びかけることのできる状況となると、さらに限られている。つまり、英語では直接的な呼びかけ方をしている

のに対して、日本語では間接的な呼びかけ方がされている。このように、呼びかけについても、日英語の違いを Kaplan の図式に従って捉えることができる。

### 3. 統一主語の要求度

英文の書き方のハンドブック（例えば、Leggett, Mead and Kramer (1985) など）をみると、同一文中では主語をむやみに変えないようにしなさいと教えているものが多い。その理由の一つには、久野 (1978) のいう「視点」の問題が関係していると思われる。話し手（あるいは書き手）は、視点を主語に置くことが最も容易であるため、聞き手（あるいは読み手）も、その発話を受け取るときに、主語に視点を置きながら解釈するのがもっとも自然である。ところが、短時間のうちに主語が頻繁に変えられると、視点をあちこちと変えなければならぬため、聞き手（あるいは読み手）に負担がかかることになる。主語をむやみに変えてはならないという原則は、日英語のどちらにもあてはまると思われるが、つぎの例文などをみると、英語の方が日本語よりも、主語の統一を要求する度合いが高いようである。

(13) a. I was much impressed with her close-knit tidiness; then, when the husband sat facing me, I was still more impressed, somehow, by the simple fact that age had come upon him. It was not an impression of unhealthiness. It was a feeling of, literally, age. (AG, 305)

b. 老夫人の眼立って小じんまりされた様子に、まず私は驚いたが、続いて向い合った X 氏の、老い込まれた感じは一層私の胸を打つものがあった。不健康というのではなく、それは文字通りに老い込まれた感じで... (永井『朝霧』、16)

英語の方は、(13a) のように主語を I に統一してあるので、読書が心理的な視点を移動する必要がない。しかも、I was impressed という同じ構文が繰り返されているし、二番目の方には more がつけられていて、書き手の意図が明確にされているために、焦点がはっきりしており、読者に対する負担は非常に



少ない。一方、日本語の方は、最初は「私は」が中心に据えられていたが、すぐ後では「私の胸を打つものが」に中心が移されているにもかかわらず、読者への大きな負担は感じられない。むしろ、こうした変化をつけることによって、表現にバラエティをもたせる効果ができるし、しかも強く心打たれたことがうまく表現されている、と言えるのではなからうか。では、もしも、英語の例文(13a)の最初の文のなかで、二番目の主語を変えたらどうであろうか。例えば、後半の主文を能動態にして I was much impressed with her close-knit tidiness; then, when the husband sat facing me, the simple fact that age had come upon him still more impressed me, somehow. とすると、読者にかかる負担が増えると同時に、焦点がぼやけてくる。

これらの観察から、統一した主語を要求するかどうかという問題は、英語の方が、心理的視点の固定化を強く求めるのに対して、日本語では視点がある程度移動してもかまわない、という一般原則の違いとして捉えることができそうである。

#### 4. 時制の一致

日本語の小説では、過去についての描写をする場合に、最初に過去時制を用いることによって、読者に記述内容が過去のことであることを知らせておいて、それから後は現在形と過去形をおりませる、という手法がよく用いられる。一方、英語ではそのような場合に、次の例にみられるように、すべて過去形で表現される。もちろん、英語にも、歴史的現在の用法がないわけではないが、日本語の場合と平行して用いられるわけではない。

- (14) a. The boy passed through the already deserted playground of the elementary school and climbed the hill beside the watermill. Mounting the flight of stone steps, he went on behind Yashiro Shrine. Peach blossoms were blooming in the shrine garden, dim and wrapped in twilight. From this point it was not more than a ten-minute climb on up to the lighthouse.

The path to the lighthouse was dangerously steep and winding, so much so that a person unaccustomed to it would surely have lost his footing even in the daytime. But the boy could have closed his eyes, and his feet would still have picked their way unerringly among the rocks and exposed pine roots. Even now when he was deep in his own thoughts, he did not once stumble. (SW, 6-7)

- b. 若者はすでに深閑としている小学校の校庭を抜け、水車のかたわらの坂を上った。石段を昇って、八代神社の裏手に出る。神社の庭に夕闇に包まれた桃の花がしらじらと見える。そこから燈台まで十分足らず登ればよいのである。

その道は実に崎嶇としていて、馴れない人は昼でもつまずくだろうが、若者の足は目をつぶっていても松の根や岩を踏み分けて行くことができた。今のように、ものを考えながら歩いていてさえ、つまずかない。(三島『潮騒』、8)

このように、英語では時制の一致の原則が守られているのに、日本語では過去形と現在形の間を行ったり来たりする、という現象をどのように捉えたらよいのであろうか。日本語のように、現在形を使うことによって、読者を過去の場面に連れてゆき、あたかもいまその現場にいるかのような臨場感を抱かせる効果がでてくる。これは、とりもなおさず、執筆している現在の時点（読者にとっては、読書時）に心理的視点を置いて過去の出来事を眺めたり、出来事の起こった過去の時点に心理的視点を切り替えて、それを目前で起こっている出来事として眺めたりするということが行われているということの意味している。それに対して、英語の方は、心理的視点を執筆時（あるいは読書時）に固定しておいて、常にそのカメラアングルから眺めるという方法がとられるために、過去の出来事は過去形（あるいは過去完了形）で表わされるのであると考えることができよう。つまり、時制の一致をめぐる観察される日英語間の違

いについても、前項と同じように、心理的視点の置き方の違いとして捉えることができる。

### 5. 指示代名詞

日本語において、指示代名詞が、前項の時制の一致現象に伴ってあらわれることがある。

- (15) a. Had he wanted to find a prostitute in his bride? There was astonishing ignorance in the fact, and Shingo felt in it too a frightening paralysis of the soul.

Did the immodesty with which he spoke of his wife to Kinu and even to Eiko arise from that same paralysis? (SM, 105)

- b. 修一は新妻に娼婦をもとめていたのだろうか。おどろいた無知だが、そこにはまたおそろしい精神の麻痺があるように、信吾には思えた。

修一が妻のことを絹子や、また英子にまでしゃべる、つつしみのなさもこの麻痺から来ているのだろうか。(川端『山の音』、121)

日本語の例文 (15b) において、「そこ」は過去時制の文のなかで使われており、執筆時（読書時）に視点を置いて、そこから過去を眺めるというかたちをとっているのに対して、視点を移して、「この」という指示代名詞が使われると、それに伴って時制も現在形に変わっており、視点の変化とあいまっている。ところが、英語の方は、一貫して過去時制が使われており、指示代名詞 *that* が使われていることからみても、視点の移動が起こっていないことがわかる。このように、指示代名詞と時制に関わる現象をめぐる日英語の違いも、英語は視点の一環性を強く求めるが、日本語は視点の移動を許す、という視点の問題として捉えることができる。

## IV. 結語

以上、日英両語の間にみられるいろいろな表現構造の違いは、それぞれが無

関係に独立した現象ではなくて、そのうちのいくつかは、Kaplan が談話構造の違いについて観察した原理と、機能文法で言うところの心理的視点の問題として、統一的に捉えることができることを示した。

(筆者は関西学院大学商学部助教授)

#### 資料の出典と略号

- AG : Edward G. Seidensticker, trans. 1962. "Morning Mist." In Ivan Morris, ed. 1962. *Modern Japanese Stories*. Tokyo: Charles E. Tuttle Company. 原作：永井龍男「朝霧」『永井龍男・阿部知二』(日本文学 62) 中央公論社, 1968, 14-30.
- BT : Alan Turney, trans. 1972. *Botchan*. Tokyo: Kodansha International Ltd. 原作：夏目漱石『坊っちゃん』岩波文庫, 1989.
- SM : Edward G. Seidensticker, trans. 1971. *The Sound of the Mountain*. Tokyo: Charles E. Tuttle Company. 原作：川端康成『山の音』新潮文庫, 1970.
- SW : Meredith Weatherby, trans. 1961. *The Sound Waves*. Tokyo: Charles E. Tuttle Company. 原作：三島由紀夫『潮騒』新潮文庫, 1967.

#### 参考文献

- 江川泰一郎. 1964. 『英文法解説』改訂新版. 金子書房.
- グロータース, W. A.・柴田武. 1967. 『誤訳——ほんやく文化論』三省堂新書.
- Hinds, John. 1983. "Contrastive rhetoric: Japanese and English." *Text* 3, 183-95.
- Kaplan, Robert B. 1966. "Cultural thought patterns in intercultural education," *Language Learning* 16, 1-20.
- 久野暉. 1978. 『談話の文法』大修館書店.
- Leggett, Glenn, C. David Mead and Melinda G. Kramer. 1985. *Prentice-Hall Handbook for Writers*. 9th ed. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall.
- Oi, Kyoko M. 1984. *Cross-Cultural Differences in Rhetorical Patterning: A Study of Japanese and English*. D. A. Dissertation, State University of New York at Stony Brook.
- Ricento, Thomas K. 1987. *Aspects of Coherence in English and Japanese Expository Prose*. Ph. D. Dissertation, University of California, Los Angeles.
- 嶋村誠. 1989. 「日英語表現の対応」『商学論究』第 37 巻第 1-4 号合併号, 629-646.